

200400842B

厚生労働科学研究費補助金
難治性疾患克服研究事業

特定疾患のアウトカム研究：
QOL、介護負担、経済評価班

平成14年度～16年度
総合研究報告書

平成17年(2005年)3月

主任研究者 福原俊一

平成14—16年度 総合研究報告書

目次

I 総合研究報告書

京都大学医学研究科 医療疫学分野

福原 俊一

II 研究成果の刊行に関する一覧表

I. 総合研究報告書

総合研究報告書

特定疾患のアウトカム研究：QOL、介護負担、経済評価班

主任研究者 福原俊一 京都大学大学院医学研究科医療疫学 教授

研究要旨

本研究班は、下記の6本の主要な研究の柱をたて、その柱のもとに研究を展開した；

1 QOL 測定に関する基礎的・方法論的研究、2 介護負担感を測定する尺度の開発検証研究、3 QOL をアウトカムとする観察研究、4 QOL をアウトカムとする非薬物介入臨床試験、5 経済評価に関する研究、6 倫理的問題に関する研究。さらに臨床班と連携した研究を実施した。

具体的な達成した成果を、以下にまとめる。

- 1 種々の包括的および疾患特異的 QOL 尺度の開発と検証、QOL 測定における種々の基礎的・方法論的諸問題の解決のための研究： QOL 欠損値の適切な処理法の検討、項目応答理論を活用した QOL の高精度・低負担測定システムの開発に関する研究、等の実施。
- 2 難治性疾患以外にも活用可能な介護負担感を測定する尺度の完成と検証。
- 3 難治性疾患を対象とし、アウトカムを QOL などの患者立脚アウトカムにおいた2つのコホート研究を計画・実施。
- 4 難治性疾患の非薬物治療方法の有効性を、QOL をアウトカムとして評価する2つの本格的な臨床試験を計画、実施した。
- 5 難治性疾患の治療に関する医療経済評価研究を実施した。
- 6 難治性疾患および重症疾患における意思決定にまつわる倫理的諸問題を整理し、実際に役立つ診療倫理指針を作成、公表した。
- 7 横断的研究班として、他臨床班の研究に協力した。

分担研究者:

流通科学大学医療福祉サービス学科 教授
下妻 晃二郎

熊本大学大学院医学薬学研究部 生命倫理学
分野 教授
浅井 篤

聖路加看護大学 精神看護学研究室 教授
萱間 真美

京都大学医学部 理学療法部 助教授
陳 和夫

京都大学医学研究科 健康情報学 助教授
中山 健夫

指すと同時に、目前の患者の QOL 向上を支援することが、社会的要請として求められている。したがって、難治性疾患克服研究事業においても、その主要な力点は、生命科学的アプローチによる病因解明と根治的治療法の開発とともに、社会医学的研究アプローチを中心とした多様な手法を駆使した、QOL 改善のための治療法や介入方法の開発およびその有効性の検証研究に置かれるべきであり、これらは車の両輪として進められなければならない。後者の難治性疾患に対する治療法や介入方法の適切な評価に際しては、疾患の正確な診断や病態の評価あるいは生命予後等の古典的な疫学指標のみでは不十分であり、疾患が患者（および介護者など）の主観的な健康度や日常生活機能に与えるインパクト健康関連クオリティオブライフ（QOL）、介護負担感、生産性や医療資源消費、等の社会的インパクトの評価が不可欠であるとの認識が、国際的に定着した。上記の前提にたち、難治性疾患患者を対象とした総合的なアウトカム研究を展開することを目指し、本研究班を組織した。

A. 研究目的

難治性疾患では、成因・治療法が未確立で予後不良なことが大きな特徴のひとつである。厚生行政の難病対策として、根本療法の開発を目

本研究班は、難治性疾患対策研究事業の中で横断基礎研究班に位置付けられており、臨床各班との協力も当班の主要な活動内容である。臨床疫学、生物統計学、計量心理学、質的研究、医療経済学、医療社会学などの methodologists が、個々の難治性疾患の臨床専門家と協力して、multidisciplinary な研究チームを形成して研究を展開した。

本研究班では、6本の研究の柱をたて、それぞれの柱のもとに研究グループが組織され、以下の独自の研究目的を設定した。同時に各グループは相互に有機的に連携しながら、プロジェクトを進行させた。

1. QOL 測定に関する基礎的・方法論的研究

最近の当研究班および内外の疫学報告により成人の5人に1人は1時間に5回以上の睡眠時無呼吸低呼吸をもつことが明らかになりつつある。難治性疾患呼吸不全関連の肥満低換気症候群(obesity hypoventilation syndrome: OHS)は閉塞型睡眠時無呼吸低呼吸症候群(obstructive sleep apnea-hypopnea syndrome: OSAHS)の重症型と考えられている。OSAHS が生活習慣病に与える影響と治療効果の評価のためには、OSAHS による日中の眠気の評価が有用で、これを測定する尺度が活用されているが、このような主観指標にはレスポンス・シフト現象が問題になりうる事が知られている。この研究でこのRSの有無やそれへの対処法について検討を行った。

2. 介護負担感測定尺度の開発と検証研究

わが国独自の事情を反映した介護負担感測定尺度の開発と検証を目的とした。インタビュー法によって介護者の主観的体験を質的に分析し、複数の疾患にわたった介護負担の共通要因を抽出して項目を作成すること、さらに神経難病および脳卒中等の患者を在宅で介護する介護者に対する調査から介護負担感尺度を確定し、その妥当性と信頼性を検証すること、を目的とした。

3. QOL をアウトカム指標にしたした観察研究

1) 睡眠時無呼吸症候群を中心とした睡眠と健康に関するアウトカム研究： OSAHS は睡眠呼吸障害の中核をなし、また、最も頻度の高い睡眠障害である。OSAHS に加え、むずむず脚症候群、概日リズム睡眠障害及び季節性情感障害の、日本人の勤労男性における有病割合の推定し、これらの存在や重症度が、健康関連 QOL、病休、事故、医療資源消費等、どのような個人・社会へのインパクトを与えるかを解析するこ

とを目的とした。睡眠に関連する各分野の専門家が診療科・講座の枠を越えて参加した。

2) 拡張型心筋症の QOL 研究： 拡張型心筋症(Dilated Cardiomyopathy : DCM) は成因・治療法が未確立で予後不良な難病の一つである。本研究は日本における DCM 患者の QOL を評価し、その関連要因と心理的適応を明らかにするものである。DCM 患者において、心不全重症度、酸素飽和度、睡眠時無呼吸、QOL の相互関係を横断的・縦断的に評価し、従来の薬物療法に加えた新しい治療の可能性を探る。一方、疾患への心理的適応の評価尺度として

Nottingham Adjustment Scale (NAS) が開発されており、鈴嶋・福原によって日本語版 NAS-J が利用可能となった(心身医学 2001)。またターミナルケア領域で注目されている Spirituality に関しては FACIT (Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-spirituality) が開発されている。本研究では、これらの多面的な評価法を用いて、DCM 患者における QOL と心理的適応、医療行為、身体要因などの相互関係の検討を試みる。

4. QOL をエンドポイントにした非薬物介入臨床試験

1) 加齢黄斑変性症 (ARM) 患者を対象とした臨床試験： ARM に対する非薬物介入(治療やケア)が QOL に及ぼす影響に関して質の高い評価を行い、得られたエビデンスを医療現場にフィードバックする目的で、次の3つの研究を行った。ア. ARM の読書困難に対するロービジョンケア前後の QOL 評価に関する研究(以下、ARM 介入研究)。イ. ア. に付随する「レスポンスシフト (RS)」研究(以下、RS 研究)。ウ. ARM の中心脈絡膜新生血管に対する光線力学療法 (PDT) の QOL 評価研究(以下、PDT 介入研究)。

2) 神経難病患者へのコーチング介入研究

コーチングは、相手の自発的な行動変容を促進するコミュニケーション技術として多分野で成果を挙げているが、医療分野でのエビデンスは乏しい。脊髄小脳変性症患者に対するコーチング介入が、患者の健康関連 QOL や心理的適応に与える影響を検討することを目的とした。

5. 医療経済評価研究

我が国でも急速に普及している在宅酸素療法は、現在約 10 万人以上が実施されている。この約 40%が慢性閉塞性肺疾患 (COPD) の患者を対象としている。在宅酸素療法に関して、今まで費用対効果は検討されていない。この研究

では、適応規準に従って COPD 患者に対して在宅酸素療法を実施した場合の費用対効果を検討した。

6. 倫理的問題の研究

医療倫理グループでは、難治性疾患や重症疾患に対する医療に関わる倫理的問題を多角的に検討しそれらに対する対策を考察・提言することを基本的な目的とした。

B. 研究方法

1. QOL 測定に関する基礎的・方法論的研究

OSAHS 患者を経鼻持続気道陽圧 (nasal continuous positive airway pressure:nCPAP) 治療前 (Pre-1) と治療 1 ヶ月以上経過した時点 (Po-1) で、自覚的な眠気を本邦でも最も頻用されている Epworth Sleepiness Scale (ESS) にて測定した。また、治療後の ESS 測定時に治療前の ESS (Pre-2-Response) を再度測定し、レスポンス・シフト現象の有無を解析・検討した。

2. 介護負担感測定開発と検証研究

ALS、脳血管障害 (CVA)、パーキンソン病 (PD) および透析患者の介護者に対してインタビュー調査を行って介護負担感の内容を質的に検討した。この結果と既存の文献とをあわせて検討し、介護負担尺度の項目を決定した。この質問紙の妥当性、信頼性、内的一貫性、並存妥当性、基準妥当性を検討する目的でこの尺度を用いてデータを収集した。また CVA については 1 専門病院の外来患者と介護者を対象にデータを収集し、解析した。

3. QOL をアウトカム指標にしたした観察研究

1) 睡眠時無呼吸症候群を中心とした睡眠と健康に関するアウトカム研究： 某県に散在する某企業の支店・営業部に勤務している、主に 30~60 歳の男性 152 人を対象として、睡眠と健康の縦断的観察研究 (前向きコホート研究) を実施した。自記式質問票により、包括的健康関連 QOL (SF-36) および睡眠の質 (PSQI)、また、3 年間の交通事故の頻度と回数・過去 1 年の病気による休業の有無および回数を測定した。自記式質問票や検査に加えて専門医による問診・診察を実施することで精度の高い診断を得るように計画した。呼吸器内科・神経内科・睡眠の専門医による診察、ならびに、簡易睡眠 PSG (睡眠呼吸障害モニター)・行動量モニター装置などによる睡眠検査も施行した。精神神経科的疾患に関しては DMS-IV に基づいた構造面接により診断した。

2) 拡張型心筋症の QOL 研究： 協力施設 (岩

手医大、大阪市大、北里大学、京都大学) でフォロー中の DCM 患者を対象として、横断研究による Study 1 と追跡研究である Study 2 により、対象者の QOL とその関連要因・予測因子を観察的に検討する。測定項目は人口学的要因、病態生理学的指標 (心機能、併存症、酸素飽和度)、心不全重症度、SF-8、ESS、ソーシャルサポート、心理的適応度。2 年間を登録期間とし、登録後 6 ヶ月間を追跡期間とする。登録は約 150 例を予定している。倫理委員会で承認済み。

4. QOL をエンドポイントにした非薬物介入臨床試験

1) ARM 患者を対象とした臨床試験： ア. ARM 介入研究：対象は、ケア対象眼の黄斑部に萎縮を有し、50 歳以上 80 歳未満の症例 (予定 150 例) である。年齢、視力、実施施設を層別化因子として、ロービジョンケア群 (介入群) と対照群にランダムに割り付けた。介入群は 6 ヶ月間のロービジョンケアを受けた。QOL 評価は VFQ25 にて測定し、baseline, 6, 12 ヶ月目に行った。その他の眼科的諸検査は baseline, 3, 6, 12 ヶ月目に行った。主評価項目は、VFQ25 により測定する「近見視力による行動」である。なお、倫理的理由から対照群では 6 ヶ月目以降にケアを受けることを可とした。イ. レスポンス・シフト (RS) 研究：ARM 介入研究結果の信頼性を確認する目的で、両群の QOL スコアに RS 現象 (特に内的基準の変化) が出現するかどうか、またその性質はどうかを確かめた。方法は、VFQ-25 の主要 8 項目について、6, 12 ヶ月目に Then-test を行うことによった。ウ. PDT 介入研究：対象は、活動性の症例を含む加齢黄斑変性例 (約 200 例) であった。PDT 介入前後の QOL (VFQ25) と眼科的諸検査の改善効果、効果予測因子の分析を行った。

2) 神経難病患者へのコーチング介入研究：

脊髄小脳変性症患者 24 例を、無作為にコーチング介入群と待機群 (3 カ月後に介入開始) に割付け、介入群には 3 ヶ月間のコーチングを実施した。介入前後の QOL、心理的適応を待機群と比較してその効果を検討した。

5. 医療経済評価研究

マルコフモデルによる費用効果分析を行った。PaO₂55torr の患者群に対して在宅酸素療法を行った場合と行わなかった場合での費用と効果の差を社会の視点から推定した。考慮した時間枠は 10 年間である。既に報告された疫学データ、費用データを用いた。また COPD 患者の効用値を求めるために、3 つの大学病院に通院

中のCOPD患者を対象にEQ-5Dを用いてQOLを測定した。

6. 倫理的問題の研究

患者の闘病記分析と神経内科通院中の難病患者インタビューの内容分析、人工透析を受けている32名の性腎不全患者を対象にフォーカス・グループインタビュー、医師に対する個人インタビュー、文献研究と現地調査、そして学際的なワーキング・グループによる共同作業などによって本研究を実施した。

7. 臨床班との協力

炎症性腸疾患班、呼吸不全班、神経変性班、ベーチェット病班、難治性血管炎班、後縦靭帯骨化症班等の各班との間で、当班の研究者を当該臨床班の分担研究者や研究協力者として相互に所属させ、具体的な研究協力を実施した。

(倫理面への配慮)

質問票による調査の実施時、個人情報保護の必要がある。本研究では、二重IDを用いることにより、個人名と回答内容が同時に処理されることを防止した。対象者が調査に参加する際に、調査の内容とその結果の取り扱いを説明し参加への同意を得た。さらに、参加した後も、質問と要望を随時に受け付けて参加の取り消し希望に応じた。本研究が用いたいずれの生理学的検査も人体に無侵襲性のものを用いた。

C. 研究結果およびD. 考察

1. QOL測定に関する基礎的・方法論的研究

初回、日中の過眠傾向を自覚的に認めなかった群において、治療後初めて治療前の状態が過眠傾向であったことを認識したことを自覚するレスポンス・シフト現象を示した患者が有意にあり、治療前ESSの評価の困難さが認識された。従って、自覚症状のみの眠気に基準を設けてみても、社会および社会生活上に支障を来す眠気を評価できない可能性が大きく、nCPAP治療の有効性を適切に評価するためには、このレスポンス・シフト現象を補正する必要性が示唆された。睡眠呼吸障害が原因の日中の過度の眠気に対する対策は、交通事故、新幹線の居眠り事故などの事象を鑑みても社会にとって非常に大きな問題であるが、主観(自覚)的な眠気は治療して初めて明らかになることがあり、社会及び社会生活上に支障を来す眠気に対する評価法は主観、客観を含めて探索すべき領域である。

2. 介護負担感測定開発と検証研究

1577名に調査票を発送し785名の介護者・患者から返送を得た(50%)。最終的な有効回答数(解析対象者数)は合計で646名であった。患者のADLは厚生労働省の寝たきり度判定尺度でC14%、B34%、A34%、J・自立が17%だった。妥当性・信頼性の検討の結果、「時間的負担」、「心理的負担」、「身体的負担」、「サービスに関連負担感」の4ドメインが抽出され、介護負担感尺度はこのドメイン別および全般負担感を含めた13項目の合計点で利用することとした。各項目は0-4の五段階で得点化するが、合計点、ドメイン別得点ともに大きな偏りはなかった。併存妥当性の検討の結果、既存の海外翻訳による介護負担感尺度のZBIとは合計点で強い関連を示した($r=0.87$)。また、ドメインとSF8の関連では時間的負担感がSF:社会生活機能($r=0.59$)、心理的負担感がMH:心の健康($r=0.63$)、身体的負担感がBP:体の痛み($r=0.64$)と関連を示した。抑うつ(CES-D)との関連は全体で $r=0.62$ であった。Known Groups Validityは介護時間($r=0.47$)、ADL($r=0.34$)だった。再調査法によって信頼性を検討した結果、各ドメインで十分な信頼性が確認された。介護負担感と患者の介護状況(患者の身体的状況、介護度、サービス利用)、QOL等との関連について、全体および疾患別の詳細な分析を現在実施中である。

3. QOLをアウトカム指標にしたした観察研究

1) 睡眠時無呼吸症候群を中心とした睡眠と健康に関するアウトカム研究: 対象者(全員男性)の平均年齢は 44.2 ± 8.34 才。睡眠呼吸障害を示す客観的所見に眠気やいびきなどの症状を伴えば睡眠時無呼吸症候群と診断できる。この集団において中程度以上の睡眠呼吸障害の頻度は30.3%であった。むずむず脚症候群は8.6%、概日リズム睡眠障害及び季節性感情障害は各2.0%に認められた。また、COPDは8.6%に認められた。QOLや経済損失など、睡眠の状態が個人・社会に対してどのような影響を与えるかを今後縦断的にフォローアップを行い、データを収集し解析する予定である。

2) 拡張型心筋症のQOL研究: 倫理審査の承認を得られた施設から順次症例登録を行い、引き続き研究を継続する予定である。

4. QOLをエンドポイントにした非薬物介入臨床試験

1) ARM患者を対象とした臨床試験: A. ARM介入研究: 現在進行中であるが、baselineのデータ解析により、以下の結果を得た。登録症例

の 64.1%は両眼性加齢黄斑変性滲出型が占め、視力が良好な方の眼の平均近見視力は $-0.64\log\text{MAR}$ 、最大読書速度は186文字/分であった。VFQ-25で測定したQOLは、全体的見え方、近見視力による行動、遠見視力、社会生活機能、心の健康、役割制限、自立の7つの下位尺度のいずれでも低かった。最大読書速度が速いほど近見視力による行動スコアと遠見視力による行動スコアが有意に高かった。また、読書に最適な文字サイズである臨界文字サイズが小さいほど、役割制限スコアと自立スコアが高かった。ウ. PDT 介入研究： PDT の3か月後のQOLとそれに影響を及ぼす因子が明らかになった。VFQ25の下位尺度スコアでは、見え方による役割制限のスコアが有意に改善していた。手術前の年齢が若い程、PDT実施前に近見視力による行動スコアが高い程、役割制限スコアが低い程、自立スコアが高い程、役割制限のスコアは改善していた。

2) 神経難病患者へのコーチング介入研究：

現段階で終了した対象（各群8例）の解析では、待機群に比較して介入群において「全体的健康感」「疾患の受容」「自己効力感」が高まる傾向が見られた。一方、「日常役割機能（精神）」は待機群のほうが高まるなど予想に反した結果も見られた。今後例数が増えた段階でさらに検討する。神経難病患者へのコーチング介入研究結論は最終結果を待たねばならないが、コーチング介入の効果は、量的な変化のみならずコーチング記録の質的な検討をも考慮する必要がある。

5. 医療経済評価研究

平成15年度の報告では、COPD患者に対する在宅酸素療法の費用対効果比は1067万円/QALYと良好ではなかった。しかし今回、在宅酸素療法の効果として女性を含むより良好な推定値を用いたこと、想定観察期間を5年から10年に変更したこと、などから費用対効果比は小さくなった。最終分析では473万円/QALYとほぼ許容範囲内と考えられた。感度分析では、在宅酸素療法の効果の影響が大きかった。この治療法による死亡率減少効果を示すハザード比が1に近くづくると急激に費用対効果比は増加した。ハザード比が0.49から0.86になると費用対効果比は1615万円/QALYに増加した。

6. 倫理的問題の研究

1) ALS患者の闘病記分析から、問題は告知・診断・呼吸器装着と気管切開・はずす自由・入院生活—孤独と死の恐怖に集約され、意思伝達

手段や根治療法の開発、多職種による介護体制の確立の重要性が明らかとなった。2)の事前指示に関する質的研究からは、事前指示書使用に関する肯定的な意見が多かったが、実際の運用に際しては細心の配慮が要求されることも明らかになった。3)の医師に対する個人インタビューでは、医療行為の差し控えと中断に対して多くのバリアが存在することが明らかとなった。4)の医療政策と倫理原則に関する研究では、難病医療を中心とする政策医療、障害者福祉、および介護保険制度のあり方に関する比較検討から、難治性疾患に対する医療政策における倫理原則の基本的方向性が提言される予定である。最後に5)に関しては、「重症疾患の診療倫理指針」に関する提言書を策定し、平成16年10月に京都にて開催した医療倫理シンポジウムにて公開した。（神経変性班と共催）

7. 他臨床班と連携

- ・臨床各班の実施するQOL研究に関して、研究デザインや尺度選択、データ解析・解釈等の点に関して密な情報交換を行い研究に貢献した。
- ・ベーチェット班とは、口腔関連QOL尺度の開発の基礎的作業を行なった。
- ・神経変性班とは、QOL評価や介護負担感測定に関して協同作業を行なった。
- ・呼吸不全班では、日中の過度の眠気尺度（ESS）の国民的標準値の測定結果、またOSAHSの簡易スクリーニング法の開発について報告した。
- ・後縦靭帯骨化症班とは、手術前の説明方法が術後の患者QOLに与える影響について臨床試験を計画し、パイロットテストを実施中である。

E. 結論

本研究班は、下記の6本の主要な研究の柱をたて、その柱のもとに研究を展開した：

- 1 QOL測定に関する基礎的・方法論的研究、
- 2 介護負担感を測定する尺度の開発検証研究、
- 3 QOLをアウトカムとする観察研究、
- 4 QOLをアウトカムとする非薬物介入臨床試験、
- 5 経済評価に関する研究、
- 6 倫理的問題に関する研究。

さらに臨床班と連携した研究を実施した。

具体的な達成した成果を、以下にまとめる。

- 1 種々の包括的および疾患特異的QOL尺度の開発と検証、QOL測定における種々の基礎的・方法論的諸問題の解決のための研究：レスポンス・シフト現象の観察と対処法、QOL欠損値の適切な処理法の検討、項目応答理論を活用

したQOLの高精度・低負担測定システムの開発に関する研究、等の実施。

2 難治性疾患以外にも活用可能な介護負担感を測定する尺度の完成と検証。

3 難治性疾患を対象とし、アウトカムをQOLなどの患者立脚アウトカムにおいた2つのコホート研究を計画・実施。

4 難治性疾患の非薬物治療方法の有効性を、QOLをアウトカムとして評価する2つの本格的な臨床試験を計画、実施した。

5 難治性疾患の治療に関する医療経済評価研究を実施した。

6 難治性疾患および重症疾患における意思決定にまつわる倫理的諸問題を整理し、実際に役立つ診療倫理指針を作成、公表した。

7 横断的研究班として、他臨床班の研究に協力した。

以上本研究班は、患者・患者家族の視点にたったアウトカムを測定する方法の開発と検証、そしてそのアウトカムを改善する介入方法の開発と実践、そしてそれらの介入方法の有効性を科学的に検証し、さらに社会に対するインパクトも考慮にいれた研究を推進することを主要な目的として3年間の研究を推進し、所期の目的を達成した。

F. 研究発表

「研究成果刊行に関する一覧表」を参照

G. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし

II. 研究成果の刊行に関する一覧表

<書籍>

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
福原 俊一 他 監訳		岡本 道雄, 井村 裕夫	QOL 評価学 測定, 解析,解釈のすべて	中山書店	東京	2005	
福原 俊一	臨床研究における健康 関連 QOL の測定と応用		幸福と医学	岩波書店	東京	2004	77-92
福原 俊一	来るべき医学・医療のパ ラダイムシフトに向け て 日本医師会への提 言	日本医師会	国民医療年鑑 平 成 15 年度(2003~ 2004)版 - 医療の 質と安全確保をめ ざして	春秋社	東京	2004	89-99
福原俊一、鈴鴨 よしみ			SF-8 TM 日本語版マ ニュアル	NPO 健康 医療評価 研究機構	京都	2004	
鈴鴨よしみ、福 原俊一	QOL の評価法 (SF-36 [®] を中心に)	千葉 直一他	リハビリテーショ ン MOOK 9 ADL・ IADL・QOL	金原出版 株式会社	東京	2004	48-56
福原俊一編著			RDQ (Roland-Morris Disability Questionnaire) 日 本語 JOA 版マニ ュアル	医療文化 社	東京	2004	
鈴鴨よしみ	QOL 尺度について —Skindex29,Dermatolo gy Life Quality Index (DLQI)を中心に—	飯塚一他	皮膚科診療プラク ティス 16 乾癬に せまる	文光堂	東京	2004	
武田美鈴、浅井 篤、			臨床倫理学 内科 学レビュー 200 5	総合医学 社	東京	2005 印刷中	
浅井篤	卒後臨床研修における 行動目標 1 : 患者-医 師関係	福井次矢	レジデントのため の卒後臨床研修ハ ンドブック—二年 間でこれだけは学 んでおかなければ ならない—	永井書房	東京	2005 印刷中	
板井孝吉郎、浅 井篤、福井次矢			臨床倫理学 内科 学レビュー 200 4、320-32 4	総合医学 社	東京	2004	
下妻晃二郎	治療法の選択、クリニカ ルパス—治療法選択に おける EBM の利用	霞富士雄	乳癌治療のコツと 落とし穴	中山書店	東京	2004	36-37
下妻晃二郎	乳癌における QOL 調査 法	伊藤良則、戸 井雅和	別冊・医学のあゆ み—state of arts	医歯薬出 版株式会 社	東京	2004	485
下妻晃二郎	105. 臨床現場における EBM・診療ガイドライン の適切な利用法	光山昌珠	乳がん診療二頁の 秘訣	金原出版	東京	2004	228-229
福原俊一、鈴鴨 よしみ、高橋奈 津子、中村元 信、宮地良樹			皮膚疾患の QOL 評 価 . DLQI, Skindex29 日本語 版マニュアル	照林社	東京	2004	
福原俊一、鈴鴨 よしみ			SF-36v2 日本語 版マニュアル	NPO 健康 医療評価 研究機構	京都	2004	

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
鈴鴨よしみ、福原俊一	MOS Short-Form 36-Item Health Survey (SF-36®)	内山 靖他	臨床評価指標入門：適用と解釈のポイント	協同医書出版社	東京	2003	68-77
福原俊一、鈴鴨よしみ、高橋奈津子、紺野慎一、菊地臣一			Roland-Morris Disability Questionnaire (RDQ) 日本語 JOA 版マニュアル	日本リサーチセンター	東京	2003	
鈴鴨よしみ、福原俊一	The 25-item National Eye Institute Visual Function Questionnaire (VFQ-25) について	新井 三樹	疾患への対応 ロービジョンケア	メジカルビュー社	東京	2003	
中山健夫		伊藤正男・井村裕夫・高久史麿	医学大辞典	医学書院	東京	2003	
中山健夫、津谷喜一郎	EBN と臨床研究	日野原重明、井村浩夫 監修	看護のための最新医学講座	中山書店	東京	2003	
中山健夫	人と健康	大塚謙、河原和夫、倉田忠男、富永典子	スタンダード栄養・食物シリーズ 1	東京化学同人	東京	2003	
中山健夫	公衆衛生学	岸玲子・古野純典・大前和幸・小泉昭夫	NEW 予防医学	南江堂	東京	2003	
訳者代表：水嶋春朔・中山健夫・望月友美子		上畑鉄之丞 監訳	根拠に基づく健康政策のすすめ方：政策疫学の理論と実際	医学書院	東京	2003	
下妻晃二郎	がん治療と Quality of Life	日本臨床腫瘍学会	臨床腫瘍学 第3版	癌と化学療法社	東京	2003	1210-1223
新保卓郎	臨床医学における経済的問題		ハリソン内科学 15版	メディカル・サイエンス・インターナショナル	東京	2003	15-20
三浦靖彦、浅井篤、細谷龍男	透析導入時の事前指示	社団法人日本内科学会認定内科専門医会	より良いインフォームド・コンセント(IC)のために	社団法人日本内科学会	東京	2003	254-58
鈴鴨よしみ、熊野宏昭	運動障害の評価：心理	岩谷力他	運動障害のリハビリテーション	南江堂	東京	2002	
鈴鴨よしみ、福原俊一	QOL とは何を意味し、どのように科学的に評価するか	前田貞亮、前川正信、川口良人ほか 監修	透析療法におけるさまざまな疑問に答える series4.	メディカルレビュー社	東京	2004	
陳和夫	肥満と睡眠時呼吸障害	山城義広、井上雄一	睡眠呼吸障害 Update エビデンス・課題・展望	日本評論社	東京	2002	93-100
下妻晃二郎	乳癌の予防と補助療法に関する新知見	小川一誠 監修、相羽恵介 編	Review of Cancer Treatment - 癌治療の Topics をフォローアップする	メディカルレビュー社	東京	2002	40-46

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
下妻晃二郎	2000 年前半の乳癌治療に関する新知見	小川一誠 監修、相羽恵介 編	Review of Cancer Treatment - 癌治療の Topics をフォローアップする	メディカルレビュー社	東京	2002	40-46
下妻晃二郎	乳癌の予防と補助療法に関する新知見	小川一誠 監修、相羽恵介 編	Review of Cancer Treatment - 癌治療の Topics をフォローアップする	メディカルレビュー社	東京	2002	47-52
下妻晃二郎	2001 年前半の乳癌予防および治療に関する新知見	小川一誠 監修、相羽恵介 編	Review of Cancer Treatment - 癌治療の Topics をフォローアップする	メディカルレビュー社	東京	2002	53-58

<雑誌>

発表者氏名	論文タイトル名	発表雑誌	巻名	ページ	出版年
Taji Y, Morimoto T, Fukuhara S, Fukui T, Kuwahara T.	Effects of Low Dialysate Calcium Concentration on Health-Related Quality of Life in Hemodialysis Patients.	<i>Clinical and experimental nephrology</i>			in press
Tam DM, Meredith LS, Kagawa-Singer M, Matsumura S, Bito S, Oye RK, Liu H, Kahn KL, Fukuhara S, Wenger NS	Trust in One's Physician: The Role of Ethnic Match, Autonomy, Acculturation, and Religiosity Among Japanese and Japanese-Americans	<i>Annals of Family Medicine</i>			in press
Yamazaki S, Sokejima S, Nitta H, Nakayama T, Fukuhara S.	Living Close to Automobile Traffic and Quality of Life in Japan: A Population-Based Survey.	<i>Int J Environ Health Res</i>	15 (1)	1-9	2005
Yamazaki S, Sokejima S, Mizoue T, Eboshida A, Fukuhara S.	Health-related quality of life of mothers of children with leukemia in Japan.	<i>Quality of Life Research.</i>	14 (4)	1079-1085	2005
Takahashi N, Kikuchi S, Konno S, Morita S, Suzukamo Y, Green J, Fukuhara S.	Discrepancy between disability and the severity of low-back pain: demographic, psychological, and employment-related predictors.	<i>Spine</i>			in press
Matsumoto H, Niimi A, Takemura M, Tetsuya U, Masayoshi T, Chin K, Tadashi M, Ito Y, Muro S, Hirai T, Morita S, Fukuhara S, Mishima M	Relationship of airway wall thickening to an imbalance between matrix metalloproteinase-9 and its inhibitor in asthma.	<i>Thorax</i>			in press
Fukuhara S, Nishimura M, Nordyke RJ, Zaher CA, Peabody JW	Patterns of Care for Chronic Obstructive Pulmonary Disease by Japanese Physicians.	<i>Respirology</i>	10 (3)		in press
Naito M, Nakayama T, Fukuhara S.	Quality of life assessment and reporting in randomized controlled trials: a study of literature published from Japan.	<i>Health and Quality of Life Outcomes</i>	2 (1)	31	2004
Sato E, Suzukamo Y, Miyashita M, Kazuma K.	Development of a Diabetes Diet-Related Quality-of-Life Scale.	<i>Diabetes Care</i>	27 (6)	1271-5	2004
Ohbu S, Igarashi H, Okayasu H, Sakai F, Green J, Heller RF, Fukuhara S, Patrick DL.	Development and testing of the Japanese version of the migraine-specific quality of life instrument.	<i>Quality of Life Research</i>	13 (8)	1489-1493	2004
Mapes DL, Bragg-Gresham JL, Bommer J, Fukuhara S, McKevitt P, Wikstrom B, Lopes AA.	Health-related quality of life in the Dialysis Outcomes and Practice Patterns Study (DOOPS).	<i>American Journal of Kidney Diseases</i>	44 (5)	54-60	2004

発表者氏名	論文タイトル名	発表雑誌	巻名	ページ	出版年
Taji Y, Morimoto T, Okada K, Fukuhara S, Fukui T, et al.	Effects of intravenous ascorbic acid on erythropoiesis and quality of life in unselected hemodialysis patients.	<i>J Nephrol</i>	17	537-543	2004
Yamazaki S, Fukuhara S, Suzukamo Y.	Household income is strongly associated with HRQOL among Japanese men but not women.	<i>Public Health.</i>			in press
Chin K, Fukuhara S, Takahashi K, Sumi K, Nakamura T, Matsumoto H, Niimi A, Hattori N, Mishima M, Nakamura T	Response shift in perception of sleepiness in obstructive sleep apnea-hypopnea syndrome before and after treatment with Nasal CPAP.	<i>Sleep</i>	27 (3)	490-493	2004
Lopes A, Leavey S, McCullough K, Gillespie B, Bommer J, Canaud B, Saito A, Fukuhara S, Held P, Port F, Young E.	Screening for depression in hemodialysis patients: Associations with diagnosis, treatment and outcomes in the DOPPS".	<i>Kidney International</i>			in press
竹上未紗、筈島茂、山崎新、中山健夫、福原俊一	The Epworth Sleepiness Scale の性・年齢階級別得点分布と日中の過度の眠気の有症割合の推定—地域住民を対象とした調査—	<i>日本公衆衛生雑誌</i>	52 (2)	137-145	2005
森田智視、下妻 晃二郎、佐藤 温、中町 正俊、Blazeby J, West K, 福原俊一、坂本 純一	EORTC QOL 調査票胃癌患者用モジュール STO 22 (日本語版) の開発	<i>癌と化学療法</i>	31 (8)		2004
山口 拓洋、大生 定義、斎藤 真梨、伊藤 陽一、森若 文雄、田代 邦雄、大橋 靖雄、福原 俊一	ALS 特異的 QOL 尺度 ALSAQ-40 日本語版—その妥当性と臨床応用にむけて—	<i>脳と神経</i>	56 (6)		2004
湯沢 美都子、鈴嶋よしみ、李 才源、福原 俊一	加齢黄斑変性の quality of life 評価	<i>日本眼科学会雑誌</i>	108 (6)	368-374	2004
内藤真理子、鈴嶋よしみ、中山健夫、福原俊一	口腔関連 QOL 尺度開発に関する予備的検討—General Oral Health Assessment Index (GOHA) 日本語版の作成—	<i>日本口腔衛生学会誌</i>	54 (2)	110-114	2004
高橋奈津子、菊池臣一、福原 俊一、鈴嶋よしみ、紺野慎一、森田智視、岩本幸英、中村孝志	腰痛 特異的 QOL 尺度 : Roland-Morris Disability Questionnaire の性・年齢階層別基準値の測定	<i>臨床整形外科</i>	39 (3)	315-319	2004
矢口久美子、甲斐一郎、佐藤みつ子、鈴嶋よしみ、鈴嶋よしみ、福原俊一	改変 Nottingham Adjustment Scale-Japan の喉頭摘出者に対する適用可能性	<i>日本看護学会誌</i>	24 (1)	53-59	2004
	SF-36v2日本語版の特徴	<i>医学のあゆみ</i>	209 (13)	1039	2004
Chin K, Uemoto S, Takahashi K, Egawa H, Kasahara M, Fujimoto Y, Sumi K, Mishima M, Sullivan CE, Tanaka K.	Noninvasive ventilation for pediatric patients including those under a year undergoing liver transplantation.	<i>Liver Transplantation</i>	11	188-195	2005
Takahashi K, Chin K, Sumi K, Nakamura T, Matsumoto H, Niimi A, Ikai I, Mishima M.	Resistant hepatic hydrothorax: a successful case with treatment by nasal continuous positive airway pressure.	<i>Respiratory Medicine</i>	99	262-264	2005
Ueda T, Tabuena R, Matsumoto H, Takemura M, Niimi A, Chin K, Mishima M.	Successful weaning using noninvasive positive pressure ventilation in a patient with status asthmaticus.	<i>Internal Medicine</i>	43	1060-1062	2004
Harada M, Taniguchi M, Ohi M, Nakai N, Okura M, Wakamura T, Tamura M, Kadotani H, Chin K.	Acceptance and short-term tolerance of nasal continuous positive airway pressure therapy in elderly patients with obstructive sleep apnea.	<i>Sleep and Biological Rhythms</i>	2	53-56	2004

発表者氏名	論文タイトル名	発表雑誌	巻名	ページ	出版年
Hattori N, Mizuno S, Yoshida Y, <u>Chin K</u> , Mishima M, Sisson TH, Simon RH, Nakamura T, Miyake M.	The plasminogen activation system reduces fibrosis in the lung by a hepatocyte growth factor dependent mechanism.	<i>American Journal of Pathology</i>	164	1091-1098	2004
Nakamura T, <u>Chin K</u> , Hosokawa R, Takahashi K, Sumi K, <u>Oh M</u> , Mishima M.	Corrected QT dispersion and cardiac sympathetic function in patients with obstructive sleep apnea-hypopnea syndrome.	<i>Chest</i>	125	2107-2114	2004
<u>Chin K</u> , Fukuhara S, Takahashi K, Sumi K, Nakamura T, Matsumoto H, Niimi A, Hattori N, Mishima M, Nakamura T.	Response shift in perception of sleepiness in obstructive sleep apnea-hypopnea syndrome before and after nCPAP treatment.	<i>Sleep</i>	27	490-493	2004
<u>Chin K</u> .	Obstructive sleep apnea-hypopnea syndrome and cardiovascular diseases.	<i>Inter Med</i>	43	527-528	2004
<u>Chin K</u> .	Effects of therapy on the metabolism and humoral factor in patients with obstructive sleep apnea-hypopnea syndrome.	<i>Sleep and Biological Rhythms</i>	2	23-27	2004
陳 和夫、大井元晴	COPD の酸素療法と NPPV 療法	日本医師会雑誌	132	367-370	2004
赤柴恒人、巽浩一郎、陳和夫、木村弘、西村正治、飛田渉、福原俊一、藤本圭作、三嶋理晃、堀江孝至(委員長)、日本呼吸器学会、睡眠時無呼吸症候群に関する検討委員会	日本呼吸器学会認定施設における SAS 診療の現状—アンケート調査から—	日本胸部疾患学会誌	42	568-570	2004
陳 和夫、巽浩一郎、赤柴恒人、木村弘、西村正治、飛田渉、福原俊一、藤本圭作、三嶋理晃、堀江孝至(委員長)、日本呼吸器学会、睡眠時無呼吸症候群に関する検討委員会	閉塞型睡眠時無呼吸低呼吸症候群における眠気評価と運転リスク	日本胸部疾患学会誌	42	571-574	2004
巽浩一郎、陳 和夫、赤柴恒人、木村弘、西村正治、飛田渉、福原俊一、藤本圭作、三嶋理晃、堀江孝至(委員長)、日本呼吸器学会、睡眠時無呼吸症候群に関する検討委員会	閉塞型睡眠時無呼吸低呼吸症候群における交通事故発生リスクの軽減に関する提言	日本胸部疾患学会誌	42	575-579	2004
陳和夫	睡眠時無呼吸症候群の診断と治療 III 病態と合併症 4.肥満と内分泌疾患	日本内科学会誌	93	1120-1126	2004
陳和夫	COPD の酸素療法。特集、COPD における疑問、難問	呼吸器科	6	372-378	2004
陳和夫	睡眠関連疾患診療のノウハウ、睡眠呼吸障害—呼吸器内科医の立場から	診断と治療	92	1133-1138	2004
Atsushi Asai, Yugo Narita, Etsuyo Nishigaki, Seiji Bito, Taishu Masano, Yukari Take, Yasuhiko Miura, Koichiro Itai, and <u>Shunichi Fukuhara</u>	Perceptions of interpersonal relationships held by patients with obstinate disease.	<i>Eubios Journal of Asian and International Bioethics</i>	15	32-34	2005

発表者氏名	論文タイトル名	発表雑誌	巻名	ページ	出版年
Kenji Maeda, Tatsuya Sakai, Kenji Hira, T. Shun Sato, Seiji Bito, Atsushi Asai, Keiko Hayano, Shinji Matsumura, Seiji Yamashiro, Tsuguya Fukui	Physicians' Attitudes toward Anticoagulant Therapy in Patients with Chronic Atrial Fibrillation.	<i>Internal Medicine</i>	43	553-560	2004
Atsushi Asai, Motoki Ohnishi, Etsuyo Nishigaki, et al.	Focus group interviews examining attitudes towards medical research among the Japanese: A qualitative study.	<i>Bioethics</i>	18	446-469	2004
Miho Sekimoto, Atsushi Asai, Motoki Ohnishi, et al	Patients' Preferences for Involvement in Treatment Decision Making in Japan.	<i>BMC Family Practice</i>	5:1		2004
Atsushi Asai and Koichiro Itai	Clinical Ethics Discussion 4: Urgent "lifesaving" clinical research.	<i>Eubios Journal of Asian and International Bioethics</i>	14	52-57	2004
西垣悦代、浅井篤、大西基喜他	日本人の医療に対する信頼と不信の構造	<i>対人社会心理学研究</i>	4	11-20	2004
浅井篤、板井孝吉郎、スリングスビーST	医療系学生に対する生命倫理学教育と倫理的態度の不一致	<i>臨床倫理学</i>	3	80-89	2004
浅井篤、尾藤誠司、千葉華月	気管内挿管チューブ抜去の是非：川崎「安楽死」事件を他山の石として	<i>生命倫理</i>	14	139-146	2004
Atsushi Asai, Motoki Ohnishi, Etsuyo Nishigaki, Tsuguya Fukui.	The issue of trust in the doctor-patient relationship in Japan. In Darryl R. J. Macer, edition, "Challenges for Bioethics in Asia", Eubios Ethics Institute	<i>Christchurch</i>		250-262	2004
浅井篤	患者の論理、医者論理：患者と医師は友達であるべきか	<i>JIM</i>			2005 掲載予定
浅井篤	ワークショップ8：医療専門職、医療関連職、および同領域学生に対する生命倫理学教育	<i>日本生命倫理学会ニュースレター</i>	26	7	2004
浅井篤	インフォームド・コンセントの基本	<i>健康科学</i>	16	11-15	2004
浅井篤	患者の論理、医者論理：よいことについて	<i>JIM</i>	15	438-41	2004
Shimozuma K, Morita S, Ohsumi S, Kuroi K, Ohashi Y	Predictors of health-related quality of life of breast cancer patients after surgery in Japan(Women's Health Outcome Study [WHOS]-01)	<i>Quality of Life Research</i>	13 (9)	1518	2004
Kuroi K, Shimozuma K	Neurotoxicity of taxanes: Symptoms and quality of life assessment.	<i>Breast Cancer</i>	11 (1)	92-99	2004
Noguchi W, Ohno T, Morita S, Aihara O, Tsujii H, Shimozuma K, Matsushima E	Reliability and validity of the Functional Assessment of Chronic Illness Therapy-Spiritual (FACIT-Sp) for Japanese patients with cancer.	<i>Support Care Cancer</i>	12	240-245	2004
下妻晃二郎	癌患者のQOL評価法. コンセンサス-癌の症状緩和医療 コンセンサス	<i>癌治療</i>	3 (4)	178-180	2004
下妻晃二郎	臨床研究におけるQOL評価-現状と課題	<i>Osteoporosis Jpn (日本骨粗鬆症学会雑誌)</i>	12 (3)	132-138	2004
下妻晃二郎	QOL研究の基本的な考え方と癌医療におけるQOL評価の現況	<i>PRACTICAL ONCOLOGY</i>	16 (3)	17-20	2004
野口海、大野達也、森田智視、相原興彦、辻井博彦、下妻晃二郎、松島英介	がん患者に対する Functional Assessment of Chronic Illness Therapy - Spiritual (FACIT-Sp)日本語版の信頼性・妥当性の検討	<i>総合病院精神医学</i>	16 (1)	42-48	2004

発表者氏名	論文タイトル名	発表雑誌	巻名	ページ	出版年
野口海、大野達也、森田智視、相原興彦、辻井博彦、下妻晃二郎、松島英介	がん患者に対する Functional Assessment of Chronic Illness Therapy - Spiritual(FACIT-Sp)日本語版の信頼性・妥当性の検討 (予備的調査)	癌と化学療法	31 (3)	387-391	2004
湯沢美都子	加齢黄斑変性の治療	日大医学雑誌	63	46-51	2004
湯沢美都子	加齢黄斑変性に対する光線力学的療法 (PDT)	眼科診療 Q&A	33	148-149	2004
湯沢美都子, 石橋達朗	(序説) 光線力学療法	あたらしい眼科	21	1289-1290	2004
湯沢美都子	(巻頭言) 黄斑疾患の Quality of Life	日本眼科学会雑誌	109	73-74	2005
藤田京子, 湯沢美都子, 中村仁美	加齢黄斑変性瘢痕期での preferred retinal locus のロービジョンエイドの選択への影響	日本眼科学会誌	108	202-206	2004
藤田京子, 湯沢美都子	加齢黄斑変性瘢痕期重症例の読書に対するロービジョンケア	日本ロービジョン学会誌	4	17-19	2004
藤田京子, 湯沢美都子	加齢黄斑変性瘢痕期重症例の読書に対するロービジョンケア	眼紀	55	619-621	2004
藤田京子	ロービジョンケア	眼科	46	1335-1338	2004
藤田京子	中心視野障害とクオリティオブライフ-加齢黄斑変性を中心に-	日本視能訓練士協会誌	33	43-48	2004
高橋寛二	脈絡膜新生血管の読影-JAT Study-	日本眼科紀要	55	513-519	2004
高橋寛二	加齢黄斑変性に対する光線力学的療法の適応	あたらしい眼科	21	1303-1311	2004
Morita S, Kobayashi K, Eguchi K, Matsumoto T, Shibuya M, Yamaji Y, Ohashi Y.	Analysis of Incomplete Quality of Life Data in Advanced Stage Cancer: A Practical Application of Multiple Imputation.	Quality of Life Research			in press
Morita S, Kobayashi K, Ohashi Y, Eguchi K, Shibuya M, Matsumoto T, Yamaji Y, Nagao K, Niitani H.	Weekly assessment of quality of life in patients with advanced non-small-cell lung cancer during chemotherapy in a randomized phase III trial.	Annals of Cancer Research and Therapy			in press
Kaptein AA, Morita S, Sakamoto J.	Quality of life in gastric cancer - a review.	American Journal of Gastroenterology. World J Gastroenterol			in press
Morimoto T, Hayashino Y, Shimbo T, Izumi T, Fukui T.	Is B-type natriuretic peptide-guided heart failure management cost-effective?	Int J Cardiol	96	177-81	2004
Kenji Maeda, Takuro Shimbo, Tsuguya Fukui	Cost-effectiveness of a community-based screening programme for chronic atrial fibrillation in Japan.	Journal of Medical Screening	11 (2)	97-102	2004
Yasuaki Hayashino, Sizuko Nagata-Kobayashi, Takeshi Morimoto, Kenji Maeda, Takuro Shimbo, Tsuguya Fukui.	Cost Effectiveness of Screening for Coronary Artery Disease in Asymptomatic Patients with Type 2 Diabetes and Additional Atherogenic Risk Factors.	J Gen Intern Med.	19 (12)	1181-91	2004
Nagata-Kobayashi S, Shimbo T, Matsui K, Fukui T, et al.	Cost-effectiveness of pravastatin for primary prevention of coronary artery disease in Japan.	Int J Cardiol			in press
新保卓郎 揚志成 茅野真男	循環器疾患における予防医学の費用対効果	呼吸と循環	52	7-12	2004
新保卓郎	予防医学による医療経済効果考	総合臨床	53	2415-21	2004

発表者氏名	論文タイトル名	発表雑誌	巻名	ページ	出版年
角谷寛	先天異常における睡眠時無呼吸症候群の診断・治療	上原記念生命科学財団研究報告集	17	279-281	2004
Y Tsuchiya, I Minami, H Kadotani, E Nishida	Resetting of peripheral circadian clock by prostaglandin E2.	EMBO Report			in press
角谷寛	高二酸化炭素・低酸素の自動制御によるマウス睡眠障害システム	三井生命科学 研究振興財団 研究報告集	20	66-71	2004
武ユカリ	決断を迫られた患者・家族のケア 意思決定が難しい要因とそのときナースにできること	看護学雑誌	64 (4)	360-365	2005
Masato Harada, Mitsutaka Taniguchi, Motoharu Ohi, Maoharu Nakai, Mutsumi Okura, Tomoko Wakamura, Masataka Tamura, Hiroshi Kadotani, Kazuo Chin	Acceptance and short-term tolerance of nasal continuous positive airway pressure therapy in elderly patients with obstructive sleep apnea.	Sleep and Biological Rhythm	2	53-56	2004
Miyashita M, Matoba K, Sasahara T, Kizawa Y, Maruguchi M, Kawa M, Shima Y.	Reliability and Validity of Japanese version STAS (STAS-J).	Palliative and Supportive Care			in press
Shirai Y, Kawa M, Miyashita M, Kazuma K.	Nurses' perception of adequacy of care for leukemia patients with distress during the incurable phase and related factors.	Leukemia Research	29 (5)	293-300	2005
Morita T, Hyodo I, Yoshimi T, Ikenaga M, Tamura Y, Yoshizawa A, Shimada A, Akechi T, Miyashita M, Adachi I.	Association between hydration volume and symptoms in terminally ill cancer patients with abdominal malignancies.	Annals of Oncology			2005
佐藤栄子, 宮下光令, 数間恵子	壮年期 2 型糖尿病患者における食事関連 QOL の関連要因.	日本看護科学会誌	24 (4)	65-73	2004
Morita T, Shima Y, Miyashita M, Kimura R, Adachi I.	Physician- and nurse-reported effects of intravenous hydration therapy on symptoms of terminally ill patients with cancer.	Journal of Palliative Medicine	7 (5)	683-93	2004
Morita T, Miyashita M, Kimura R, Adachi I, Shima Y. Emotional	burden of nurses in palliative sedation therapy.	Palliat Med	18	550-557	2004
Shoda N, Takeshita K, Seichi A, Akune T, Nakajima S, Anamizu Y, Miyashita M, Nakamura K.	Measurement of occipitocervical angle.	Spine	29(10)	E204-8	2004
出江紳一、鈴木亮二、鈴木 鴨よしみ	Home-based teletherapy (テレリハビリテーション)	臨床リハビリテーション	13	665-667	2004
Alonso J, Ferrer M, Gandek B, Ware JE, Aaronson NK, Mosconi P, Rasmussen NK, Bullinger M, Fukuhara S, Kaasa S, Lepelge A and the IQOLA Project Group.	Health-related quality of life associated with chronic conditions in eight countries: Results from the International Quality of Life Assessment (IQOLA) Project.	Quality of Life Research	13 (2)	283-298	2004
Nakayama T, Fukuhara S, Kodanaka T.	Contributions of Clinical epidemiologists and medical librarians to developing evidence-based clinical practice guidelines in Japan: A case of the treatment of rheumatoid arthritis	the Journal of Society of General Medicine	4 (1)	21-28	2003

発表者氏名	論文タイトル名	発表雑誌	巻名	ページ	出版年
Hashimoto H, Green J, Iwao Y, Sakurai T, Hibi T, Fukuhara S	Reliability, validity, and responsiveness of the Japanese version of the inflammatory bowel disease questionnaire.	<i>Journal of Gastroenterology</i>	38(12)	1138-1143	2003
Fukuhara S, Lopes AA, Bragg-Gresham JL, Kurokawa K, Mapes DL, Akizawa T, Bommer J, Canaud BJ, Port FK, Held P.	Health-related quality of life among dialysis patients on three continents: The Dialysis Outcomes and Practice Patterns Study.	<i>Kidney International</i>	64(5)	1903-1910	2003
Nakayama T, Fukui T, Fukuhara S, Tsutani K, Yamazaki S.	Comparison Between Impact Factors and Citations in Evidence-Based Practice Guidelines.	<i>Journal of the American Medical Association</i>	290(6)	755-756	2003
Suzukamo Y, Fukuhara S, Kikuchi S, Konno S, Roland M, Iwamoto Y, Nakamura T, and Committee on Science Project	Japanese Orthopaedic Association. Validation of the Japanese Version of the Roland-Morris Disability Questionnaire.	<i>Journal of Orthopaedic Science</i>	8(4)	543-548	2003
Mapes DL, Lopes AA, Satayathum S, McCullough KP, Goodkin DA, Locatelli F, Fukuhara S, Young EW, Kurokawa K, Saito A, Bommer J, Wolfe RA, Held PJ, Port FK.	Health-related quality of life as a predictor of mortality and hospitalization: The Dialysis Outcomes and Practice Patterns Study(DOPPS).	<i>Kidney International</i>	64(1)	339-349	2003
Mitani H, Hashimoto H, Isshiki T, Kurokawa S, Ogawa K, Matsumoto K, Miyake F, Yoshino H, Fukuhara S.	Health-Related Quality of Life of Japanese Patients With Chronic Health Failure -Assessment Using the Medical Outcome Study Short Form 36- .	<i>Circulation Journal</i>	67(3)	215-220	2003
Saran R, Bragg-resham JL, Rayner HC, Goodkin DA, Keen ML, Van Dijk PC, Kurokawa K, Piera L, Saito A, Fukuhara S, Young EW, Held PJ, Port FK.	Nonadherence in hemodialysis: ssociations with mortality, hospitalization, and practice patterns in the DOPPS.	<i>Kidney International,</i>	64(1)	254-262	2003
内藤 真理子、鈴鴨 よしみ、中山 健夫、福原 俊一	口腔関連 QOL 尺度開発に関する予備的検討 - General Oral Health Assessment Index(GOHA)日本語版の作成 -	<i>日本口腔衛生学会誌.</i>	54	110-114	2004
江里 健輔、福原 俊一	慢性動脈閉塞症患者に対するリポ PGE ₁ 製剤の薬剤疫学的調査 -健康関連 QOL (SF-36) を中心にして-	<i>日本血管外科学会雑誌</i>	12(6)	571-580	2003
紺野 慎一、鈴鴨 よしみ、福原 俊一、菊地 臣一	【EBM 時代の整形外科治療戦略】QOL 評価 Roland-Morris Disability Questionnaire (RDQ) 日本語版の作成と文化的適合	<i>整形外科</i>	54(8)	958-963	2003
那須 吉郎、福原 俊一	振動障害患者に対する LipoPGE ₁ 製剤(リプル)の投与前後における QOL (SF-36) スコアの推移の検討 -特に包括的健康関連 QOL (SF-36) に着目して-	<i>臨床医薬</i>	19(6)	139-155	2003
河本 純子、大生 定義、長岡 正範、鈴鴨 よしみ、紀平 為子、水野 美邦、伊藤 陽一、山口 拓洋、大橋 靖雄、福原 俊一、近藤 智善	日本人における Parkinson's Disease Questionnaire-39 (PDQ-39) の信頼性評価	<i>臨床神経学</i>	43(3)	71-76	2003
小田中 徹也、中山 健夫、福原 俊一	医学系大学院での EBM ワークショップ:図書館員の参加とその効果	<i>医学図書館</i>	50(2)	1-5	2003

発表者氏名	論文タイトル名	発表雑誌	巻名	ページ	出版年
中山 健夫、 <u>福原 俊一</u> 、 小田中 徹也	【関節リウマチ (RA) における EBM の展開】 新しい診療ガイドラインの作成とエビデンスの調べ方	EBM ジャーナル	4 (5)	512-517	2003
高橋 奈津子、鈴鴨 よしみ、 <u>福原 俊一</u>	【EBM時代の整形外科治療戦略】QOL 評価とは -SF-36®を中心に-	整形外科	54 (8)	951-957	2003
高橋 奈津子、鈴鴨 よしみ、 <u>福原 俊一</u>	QOL の測定尺度 健康関連 QOL 尺度 /SF-36	総合リハビリテーション	31 (7)	685	2003
筈島 茂、 <u>福原 俊一</u>	Librarian のための薬学 基礎の基礎 疫学	薬学図書館	48 (2)	146-148	2003
中山 健夫、 <u>福原 俊一</u> 、 小田中 徹也	リウマチ診療のガイドライン作成に向けて	現代医療	35 (4)	868-871	2003
東 尚弘、 <u>福原 俊一</u>	【医療をめぐる国際比較】ヘルスサービス研究	現代医療	35 (4)	124-127	2003
Gordon L. Noel、 <u>福原 俊一</u>	【医療をめぐる国際比較】米国における医学教育、卒後研修および専門医の質の保証 -Professionalism と自己規制	現代医療	35 (4)	107-117	2003
池上 直己、門脇 孝、 <u>福原 俊一</u>	【医療をめぐる国際比較】今、問われる医療の質とアウトカム	現代医療	35 (4)	2-22	2003
本多 一郎、 <u>福原 俊一</u>	誰がQOL評価をするべきか！ 患者にとってのより良いQOL評価とは	治療	85	688-690	2003
Sakurazawa H, Iwasaki A, Higashi T, <u>Nakayama T</u> , Kusaka Y.	Assessment of exposure to magnetic fields in occupational settings.	Journal of Occupational Health	45	104-110	2003
<u>Asai A</u> , <u>Nakayama T</u> , Naito M.	Ethics in questionnaire-based research.	Eubios Journal of Asian and International Bioethics	13 (4)	147-52	2003
<u>Nakayama T</u> , Fukui T, Fukuhara S, Tsutani K, Yamazaki S.	Comparison between impact factors and citations in evidence-based practice guidelines.	Journal of the American Medical Association (JAMA)	290 (6)	755-6	2003
Owada IH, <u>Nakayama T</u> .	Smoking patterns of university woman students in Miyagi, Japan: the Miyagaku Study.	Journal of Epidemiology	13 (6)	296-302	2003
<u>Nakayama T</u> , Budgell B, Tsutani K.	Confusion about the clinical practice guidelines in Japan: on the way to a social consensus.	International Journal for Quality in Health Care	15	359-360	2003
<u>Nakayama T</u> , Fukuhara S, Kodanaka T. ;:	Contributions of clinical epidemiologists and medical librarians to developing evidence-based clinical practice guidelines in Japan: A case of the treatment of rheumatoid arthritis.	General Medicine	4 (1)	21-8	2003
山崎茂明、 <u>中山健夫</u>	非英語圏の臨床試験文献抄録はどこまで構造化されているか	情報管理	45(10)	666-72	2003